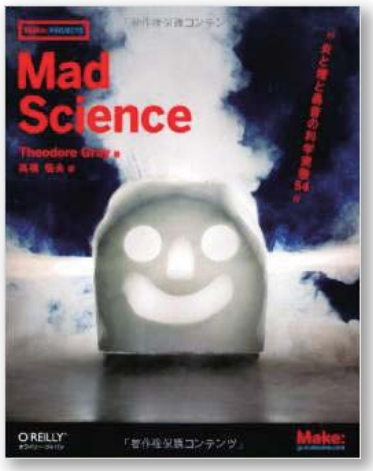
おすすめ本



●Make:PROJECTS Mad Science 炎と煙と轟音の科学実験54

著者名：Theodore Gray（翻訳:高橋 信夫）
出版社：オライリー・ジャパン

マッドサイエンスとは心惹かれるタイトルだ。「花火をばらして取り出した火薬を使って…」などということは誰でも考えたことがあると思うが、実際に行うことはほとんどなかったに違いない。この本はそういった思い付きを実際に試しているのだ。最初の実験は金属ナトリウムに塩素ガスを吹き付けて塩を作るという、危険極まりない実験である。用意するもの、実験手順、注意点をあげ、実際に行った様子を美しい写真で示してくれている。いったいどんな実験を行っているのか、読んでいるだけでわくわくできる。

眺めていると、実際に自分で試してみたいと思うが、この本では実行に伴う危険を明瞭に示し、大きな危険が伴うところでは実行するべきではないという趣旨のことが書かれている。「はじめに」では各種取扱説明書の過剰なまでの注意書きを取り上げ、それが本当の危険性を隠してしまっている現状を指摘している。この本であげている危険は本当の危険なのだ。それを把握したうえで実験するべきか、しないべきかを判断するのは読者であるというわけだ。これこそ、真に科学的な姿勢といえるのではないだろうか。

（推薦者:図書館長　高木　先生）

●海賊とよばれた男（上）（下）

著者名：百田　尚樹
出版社：講談社（講談社文庫）

有名な図書なので、読んでいる人もいると思います。要約すれば、明治時代の小さな会社が、頭脳とサービスで周囲大手の会社と張り合い、やがて世界の同業者にも恐れられる会社に成長する波乱万丈の物語です。石油業界の話ですが、丁寧な説明で記載されているので苦労なく読むことができます。

ある石油会社トップの人生を描いた物語ですが、併せて国内の石油会社の歴史や世界情勢の背景、更には世界の石油を牛耳る「石油王」と呼ばれる会社（そのトップは当然億万長者）の当時の利益獲得の仕組みまで記載されています。主人公は、石油について明治、大正、昭和の激変する産業構造のいかなる部分で先見的価値を見出し、そして他の会社と張り合っていったのか、そして敗戦を迎え「0」の状態から何を見出し、発展し、そして世界大石油会社と張り合うようになったのかが読みやすい内容で記載されています。併せて石油業界や石油需要の歴史や船会社との関わり等に対する広い知識も身につきます。

物語が痛快なのは、その会社トップの判断です。他がやらない、他には及ばない「あっ」と驚くような視点、判断及び行動で会社をリードしていきます。またその内容から「リーダーシップ」、「部下からの信用」の一例を見出すことが出来ます。それは、社会人生の上での判断、信念の持ち方の指標になると思っています。図書館にもありますので、興味があれば是非、読んでみて下さい。

（推薦者:商船学科　寶珠山 先生）

●まんがでわかる7つの習慣①～④

フランクリン・コヴィー・ジャパン（監修）
出版社：宝島社

大ベストセラー「7つの習慣」をわかりやすいストーリーをベースにまんが化。
原作の「7つの習慣」を読むほうがベターなのはわかるが、かなり気合を入れないと原作を読むことは大変である。
しかし、本作品はとても読みやすいだけでなく、ストーリーがあることで具体的に使用できる場面もイメージしやすい。内容に関しては読んでからのお楽しみとして割愛させていただくとしよう。様々な悩みを抱えた学生諸君にとって本作品の全てが参考になるかどうかは分からないけれど、何かの役には立つかもしれない。予定のない週末にでも手に取って一読されることをお勧めする。現在、続きが刊行中なので残りの巻が出版されるのが楽しみである。

（推薦者:電子機械工学科　瀬濤　先生）

●昨夜のカレー、明日のパン

著者名：木皿泉
出版社：河出書房新社

7年前に25歳で死んだ一樹。遺された嫁のテツコと一緒に暮らし続ける一樹の父・ギフ（義父）との何気ない日常に鏤められたコトバが心をうつ、8篇から成る小説である。
どちらかといえば悲しい話、けれども暖かく、優しさを感じる。どんな人にも日常はあって、それは、嫌でも坦々と過ぎていく。悲しいこともあるけれど、それも含めて楽しいのかもしれないと思える。
不安を抱えているけれど、それでも大丈夫、明日は必ずやってくるんだと思わせてくれる作品である。

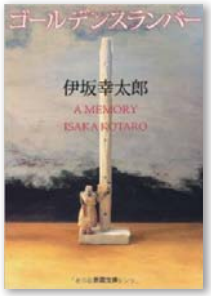
（推薦者:情報工学科　桝田　先生）

●聖☆おにいさん

著者名：中村　光
出版社：講談社（モーニングKC）

イエス・キリストと釈迦が、21世紀はじめの東京・立川のアパートで節約バカンス。二人の弟子たちや家族、天使と悪魔、そして世界中のいろんな神様たちが、現代日本人と誤解を重ねて、楽しく愉快に暮らす。
このマンガの最も優れた点は、人間社会のさまざまな矛盾に対する巧みな風刺を満載しながら、けしてどの宗教に対しても冒涜に堕していないところである。人間社会や実在の宗教組織信者たちの抱えるさまざまな欠点を笑い飛ばしつつ、宗教や信仰そのものに敬意を払う。これこそ『シャルリエブド』の悪質な弱いものいじめの"satire"と違う、本物の上質な「風刺」である。

（推薦者:総合教育科　日下　先生）



●ゴールデンスランバー

著者名：伊坂幸太郎
出版社：新潮社（新潮文庫）

私はこの本を高校生の時に読みましたが、手に汗にぎる展開が面白く、夢中になってページをめくった記憶があります。どんな内容かといいますと、首相暗殺の濡れ衣を着せられた男が、さまざまな人々の力を借りてひたすら逃げる作品です。物語の至るところに張られていた伏線が、これほどまで見事に回収されていく作品は他にありません。今まで数多くの本を読んできましたが、その中でも五本の指に入るくらい好きな本なので、皆さんもぜひ読んでみてください!

（推薦者:図書館　司書　森川）